

『一握の砂』の鑑賞・評釈を新たな視座で再検討！

歌集の主題を形成する「我を愛する歌」151首を評釈し、
1首ごとの発想と表現から、文学テキストとしての構造を解明

啄木 我を愛する歌



— 発想と表現 —



一握の砂を示しし人を忘れ

なみだのごず
頬につたふ

おお 太 田 登

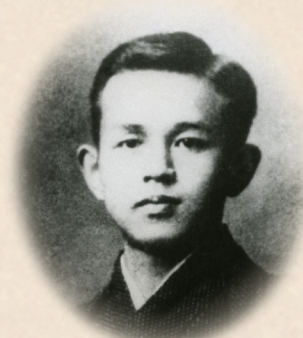
(天理大学名誉教授)

2022年12月初旬刊行！

定価 4,950 円 (本体 4,500 円 + 税 10%)

A5判・上製本・カバー装・392頁

ISBN978-4-8406-9772-9 C1095 ¥4500E



蟹われ泣きぬて
東海の
小島の
磯の
白砂に

啄木という抒情主体の表現世界を明らかに 太田 登

短歌という作品をどのように解釈すべきか、ながくこの課題と向きあってきた結果が本書となった。こと啄木短歌の注釈や鑑賞に関しては、岩城之徳や今井泰子らの先学の恩恵によるところが大きい。とりわけ『一握の砂』は、啄木自身の伝記的事実を反映させた解釈にかたよりがちであった。そうした『一握の砂』という文学テキストのなかの「われ」と作者である啄木とを一元化する単一的な視点ではなく、うたわずにはいられない言葉と心をいかに発想し、いかに表現しえたかという多層的な視点によって、啄木という抒情主体の表現世界を明らかにすることをめざした。

本書は、従来からの『一握の砂』の鑑賞や評釈を再検討し、『一握の砂』という歌集の主題を形成する第1章「我を愛する歌」の151首を評釈するものである。それは漂泊と挫折の人生が主人公である都市生活者の視点から物語化された『一握の砂』という文学テキストとしての構造を解明するものであり、近代短歌ひいては現代短歌における発想と表現の意味を再検証することでもある。

八木書店
YAGI BOOK STORE LTD.

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-8 Tel:03-3291-2961 / Fax:03-3291-6300

pub@books-yagi.co.jp http://www.books-yagi.co.jp

啄木研究 50 年の集大成となる新たな評釈！

序論として「短歌史を創る『一握の砂』の意義」を掲げ、
巻末に索引 3 種（啄木短歌索引／詩歌作家別索引／人名事項等索引）を収録

【本文見本】
(85%縮小)

99 人並の／100 誰が見ても／101 はたらけど

●101 はたらけど
はたらけど猶わが生活楽にならざり
ちつと手を見る

【歌意】働いても働いても、いっこうに私の生活は楽にならない。いったいどうしたことであろうかと、自分の手をつくづく見つめるのである。

【制作】明治四十三年七月二十六日夜（歌稿ノート）。「はたらけど」猶我が生活楽にならざりちつと手を見る」

【初出】「東京朝日新聞」（明治43年8月4日）「手帳の中より」五首のうち。「はたらけど働けど猶我が生活楽になら

217

1 東海の

●1 東海のとうかいのこじまの磯のいその白砂しろすなに
われ泣なきぬれて
蟹かにとたはむる

【歌意】東海に浮かぶ小さな島の、その浜辺の白
いる孤独な漂泊者がここにいる。

【制作】明治四十一年六月二十四日（歌稿ノート）

【初出】「明星」（明治41年7月）「石破集」百十四頁

【重出】「創作」（明治43年7月）「自選歌号」二十

【主題】「われ泣きぬれて」

【評釈】「一握の砂」という文学テクニクの書き出しは主人公が「泣きぬれて」登場する場面からはじまる。歌集の巻頭に自讃歌として据えられたこの歌の主題は、二行目「われ泣きぬれて」という感傷性にある。この感傷性こそがいわば通奏低音のように「一握の砂」という歌集の全体に響いている。

北海道より上京してまもない明治四十一年（一九〇八）六月二十五日の日記に、「頭がすっかり歌になつてゐる。何を見ても何を聞いても皆歌だ。この日夜の二時までに百四十一首作つた。父母のことを歌ふの歌約四十首、泣きながら」とあり、「われ泣きぬれて」は、「小説への志向に烈しく燃えながら、啄木の精神的雰囲気は短歌制作を刺激するような環境のなかに彩られていた」（国崎望久太郎「増訂啄木論序説」昭和41年1月、法律文化社）時代の啄木

3



申込書	太田登著／八木書店刊		2022年12月初旬刊行		取扱店（番線印）
	啄木 我を愛する歌 — 発想と表現 —		〔 〕冊		
	ISBN978-4-8406-9772-9 C1095 定価 4,950 円（本体 4,500 円＋税 10%）				
	お名前（ふりがな）		TEL		
ご住所 〒		FAX			
		E-MAIL			